

4. 入り込み及び利用予測

1. 入り込み増加の要因

白山および山麓地域に対して、入り込みが増加する要因としては、「利用者側からする社会的ニーズに伴う自然増」と「受け入れ側に求められる対応」との二つに大きく分けることが出来るであろう。

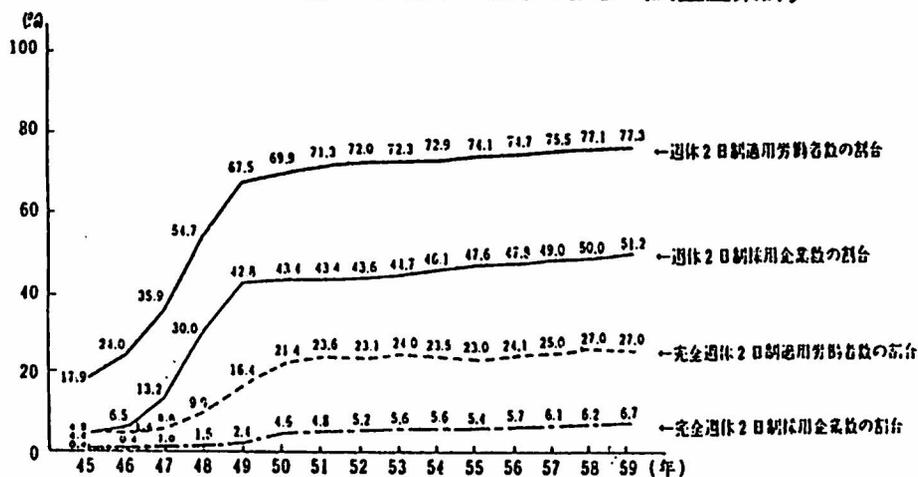
ア. 社会的ニーズに伴う自然増

白山及びその周辺に対する入り込みの社会的ニーズに伴う自然増の要因としては、次のとおりのものである。

- (1) 週休二日制は既に70%を超え、着実に普及しつつある。
- (2) 都市への人口集中は今後も続き、平成12年には70%に上昇する。
- (3) 国民経済は昭和55年に比べて平成12年GNPで20%増の12%に成長するものと思われる。
- (4) 近年における国民意識は昭和55年頃を境として「物質的な豊かさ」から「心の豊かさ」を、また生活の力点も「食住」から「レジャーを含めた余暇利用」に転換しつつある。
- (5) 勤労者世帯の実収入は年々緩やかな上昇基調にある。
- (6) 自由時間関連支出の全消費支出に対する割合は概ね横ばいであるが、スポーツ関連支出の増とともに、旅行関連支出も緩やかに上昇している。
- (7) 旅行関連支出のうち交通費がほとんど横ばいであったのに対して、宿泊費は、昭和38-60年比2.9倍の伸びを示している。
- (8) 国民の自由時間は昭和45-60年比で平日・日曜ともに6-7%増加しており企業も連続した休暇や年次有給休暇を増やす方向にあり、このことも間接的に勤労所得の増加につながってゆく。
- (9) 余暇利用における勤労者の意識の中には、「旅行」に対する希望が潜在的に強く、特に、三日以上の連続した休暇では、半数に近い人々が「宿泊旅行」を望んでいる。
- (10) 余暇に対する欲求において、20才から39才の働き盛りの層で余暇をもっとほしいという希望が最も多かった。
- (11) 国内旅行の宿泊数では昭和60年で前年比10%の伸びであった。
- (12) 昭和60年の宿泊額は前年比2%の減であった。

- (13) 宿泊観光レクリエーションへの参加については、実態が47%であるの
 に対して、「参加したい」とするものは82%の高率を示した。
- (14) 同上の不参加の理由は「なんとなく」「金銭的な余裕がない」「連
 続して休めない」の三者が大きな比重を占めている。
- (15) 宿泊観光レクリエーションに対する目的の上位を占めるものは、
 「美しい景観」「温泉」「くつろぎ」「料理」である。

週休2日制の普及率の推移（調査産業計）



- (注) 1 労働省「黄金労働時間制度等総合調査」(59年12月)による。
 2 58年以前は9月末、59年は12月末現在である。

2. 入り込みに対する考え方

ア、自然増加分の予測

次頁の「気象と登山」のグラフにも見られるとおり、白山の登山者数は昭和48年を境として、明らかにその増率に変化をみせている。この現象の想定される原因については、第一次石油危機、第二次石油危機、高校総体などの登山者数に影響を及ぼしたであろう社会情勢やイベント、更に、図に見られる気象条件があげられる。

このデータから将来を予測するため種々試行を繰り返した結果、白山登山者の推移とかなり良い相関を示した週休二日制普及率のカーブを予測のための曲線として適用することとした。

このグラフによると、曲線は昭和49年まで急な勾配で上昇するが、その後は一転して極めて緩やかな上昇となっている。

そこで、昭和48年までの白山登山者数と週休二日制普及率との間の相関を解析した結果相関係数0.98413を得た。標本数は4と少ないが95%の信頼区間は0.55-0.99となり、標本数からしても、かなり高い相関関係にあるといえる。

次に緩やかな上昇部分の考え方であるが、これの始点をどの程度にするかは将来の予測値に直接影響を及ぼす重要なことである。

図「気象と登山」の登山者数が横ばい状態に入ってから天候（金沢気象台のデータ）と登山者数との間にははっきりとした相関が認められ、その振幅は5,000-6,000人に達している。このことは、予測線を引くとしても天候の状態いかんでは3000人程度は上下することを示しており、社会的な特異条件はその上加わるものであると考えられよう。

このようなことを勘案し、天候の変動・登山者数の変動をにらみながら昭和50年の予測起点を31,000人（昭和50年週休二日制普及率69.9%に換算率： $*10 \div 0.5-40$ として $309.5=310$ ）とした。

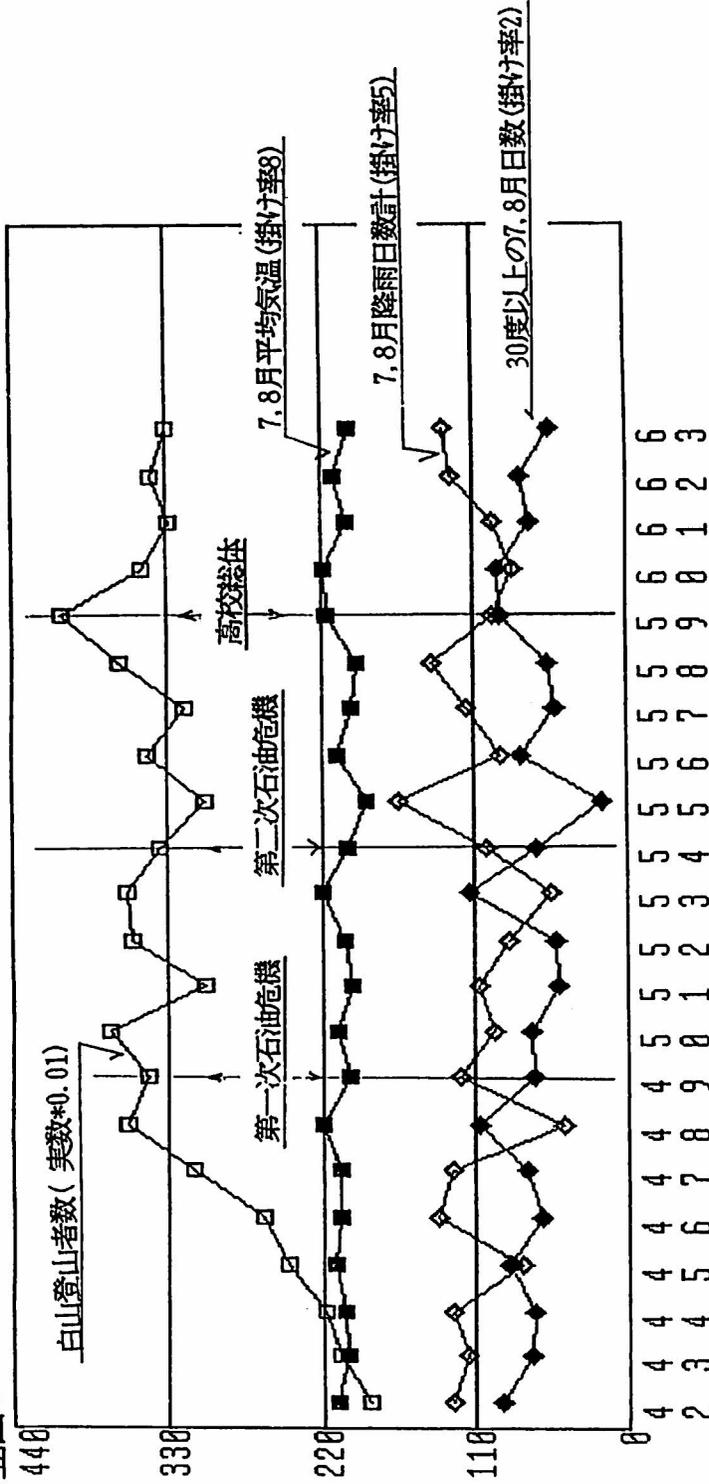
この結果得られた将来予測の回帰式は「週休二日制と白山登山」の2図に示すとおりであり、

予測直線の方程式： $Y=4.0485X+108.36$

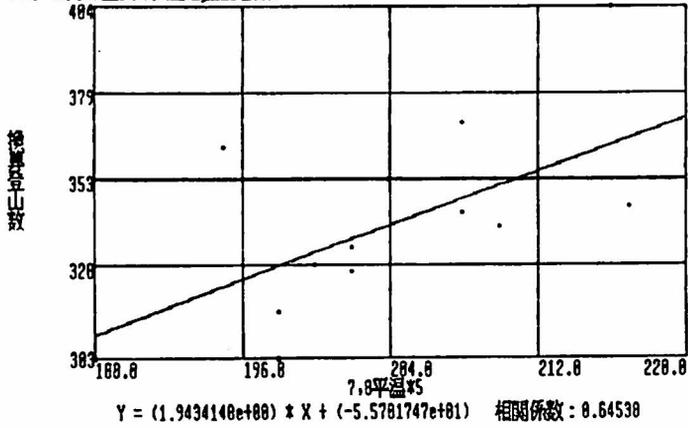
同上の相関係数： $r=0.99203$ （標本数10:95%信頼区間0.96-0.98）

となっている。

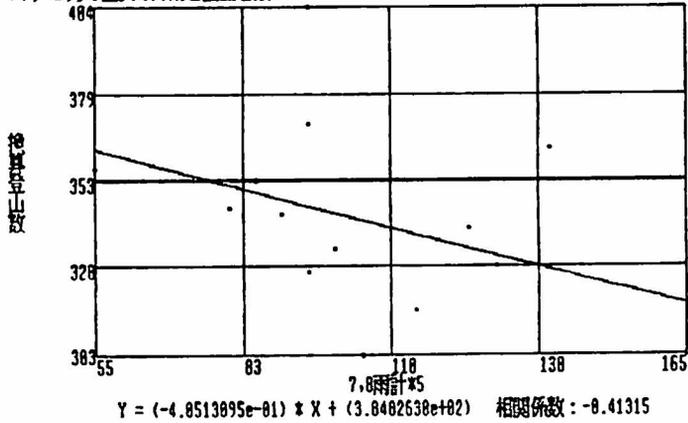
[気象と登山]



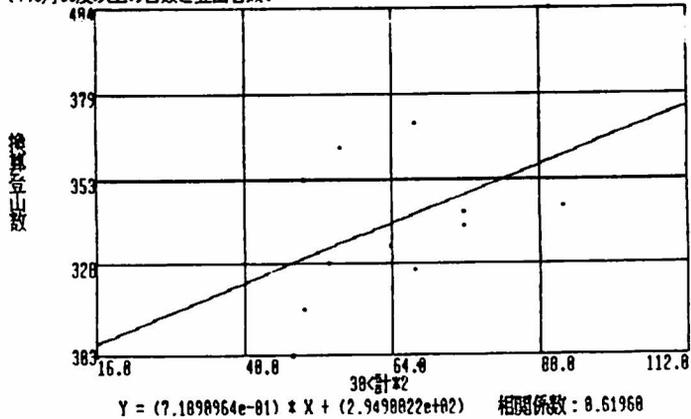
(7. 8月の金沢の気温と登山者数)



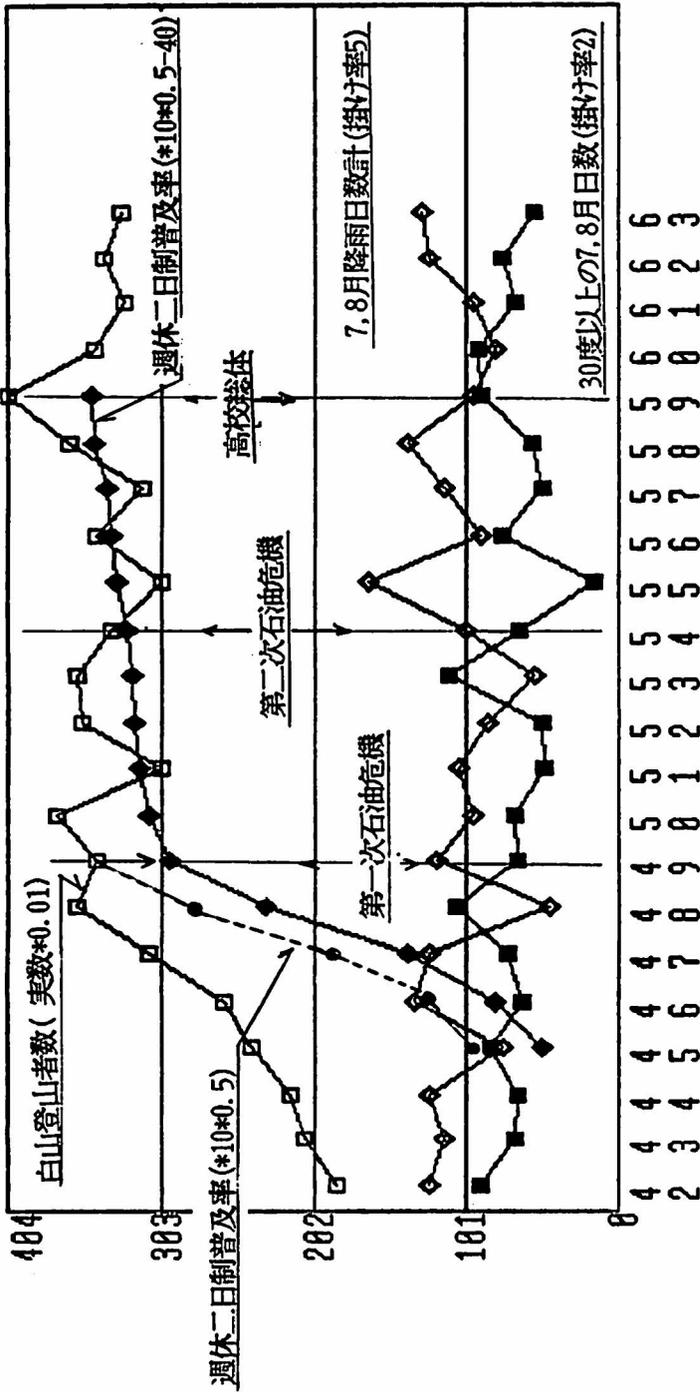
(7. 8月の金沢の降雨と登山者数)



(7.8月30度以上の日数と登山者数)

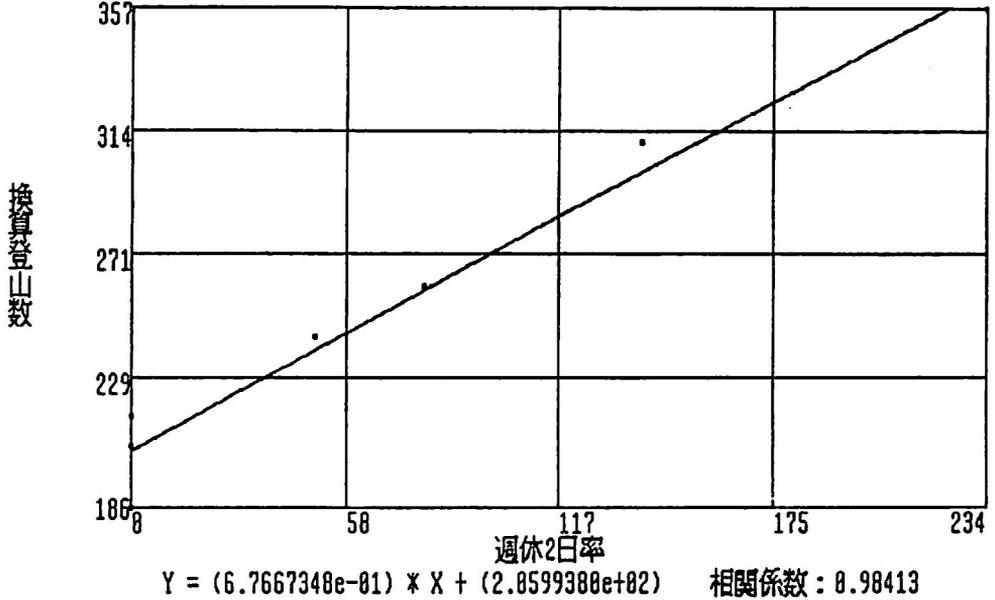


[週休二日制と登山者数]



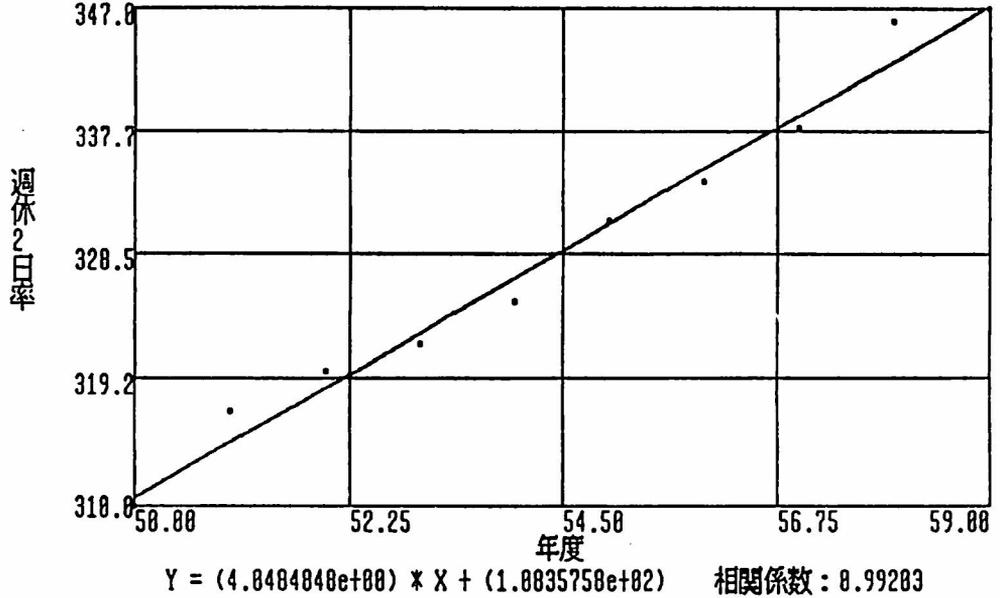
週休二日制普及率急上昇部分の回帰直線

〔週休二日制と登山者数〕



週休二日制普及率緩勾配部分の回帰直線

〔週休二日制と白山登山〕



[金沢気象台の資料]

89.02.07 混 L=0050 C=0170

年度	7月降雨日	8月降雨日	8月降雨日 17月>30日数	8月>30日数	登山人数	7月気温	8月気温	記事	換算登山数	7.8平温*8	7.8雨量*5	30日*2	休日2日率
50	11	8	16	18	37008	25.7	26.3		370	208	95	68	310
51	6	15	14	10	30265	24.7	24.8		303	198	105	48	317
52	7	10	16	9	35425	26.0	25.1		354	204	85	50	320
53	4	7	28	28	35696	27.5	27.5		357	220	55	112	322
54	9	11	12	20	33372	24.4	26.1	2次石油危機	334	202	100	64	325
55	22	11	4	4	30319	22.9	24.2		303	188	165	16	331
56	9	9	21	17	34356	26.6	25.5		344	208	90	76	334
57	12	11	6	19	31593	23.9	25.7		316	198	115	50	338
58	18	10	6	22	36293	22.6	26.2		363	195	140	56	346
59	14	5	20	25	40374	26.0	27.9	高校総体	404	216	95	90	347
60	14	2	15	31	34631	25.4	28.9		346	217	80	92	
61	15	4	8	26	32679	23.3	27.1		327	202	95	68	
62	13	12	18	20	34040	26.1	26.5		340	210	125	76	
63	14	12	3	24	32861	23.4	26.7		329	200	130	54	
													1% \times 10 \times 0.5

これまでの考察に基づいて、白山に対する入り込みの自然増予測直線として週休二日制の普及率直線を採用することにしたのであるが、このことによって、白山の登山者数には上限が設定されることとなった。このことは、一見不合理のように思われるが、週休二日制が100%ゆきわたった姿を示すことになるので、実際にも上限が存在すると考えた方が正しいのではなかろうか。ただし、この上限値は、登山に対する便利さが飛躍的に良くなるなどの環境改善によって引き上げることは可能である。

ここでは先ず登山環境を現状に固定しておいて、先に求めた回帰式により、いくつかのケースを計算した結果は下のとおりである。

回帰式： $Y=4.0484848X+108.35758$

登山者の上限 $46,000+3,000=49,000=50,000$ 人（平成24年）

昭和63年 $4.0484848*63+108.35758=36,341$ （実数32,861）人

平成12年 $4.0484848*75+108.35758=41,199$ 人

イ、道路延伸によるインパクト効果の予測

中飯場までのバス利用が行われると想定した場合、登山に要する時間が約1.5時間短縮されることとなり、疲労度の軽減・家族登山の容易化・日帰り登山の増加等、かなりのインパクト効果が期待出来る。

しかし、問題点が全くないわけではない。まず第一には運転されるバスが民間会社のものであることである。すなわち、民間のバスは利益の伴わない運行を行うことはない。従って、運行ダイヤが土曜・日曜、7月・8月集中型に組まれるであろうし、その他については極端な間引き運転になるものと思われる。また過密運搬日の山上宿泊施設容量との兼ね合いにもかかわってこよう。第二には、マイカーの問題である。昭和62年度に実施した登山利用に関するアンケート調査結果によれば、交通混雑時にとられた規制に対して規制が必要であるか、やむを得ないとした回答数は約85%にのぼり、一見、交通問題に対して理解が高いように見えるが、この時は別当出合の駐車場が満車になったため、やむを得ずとられた措置であって、とにかく別当出合までのマイカー進入は可能であった。これらの事情は、昭和63年の山麓利用調査において道路計画に関するアンケート調査を実施した際、総数では計画に対する賛否がほぼ均衡し、前年度に得られた結果とかなり違ったものであったことが示しているといえる。

このような事柄を考えると、道路延伸が当初に掲げたとおりのインパクト効果を発揮するとは単純には考え難いように思われる。

すなわち、山上施設の対応、バス運行ダイヤの管理とマイカー問題の適切な管理などが行われなければ、インパクトは最初の頃だけにとどまり先細りとなることも考えられる。したがって、インパクトの効果を単独にとりだして論議することに問題点があるとも考えられるので、ここでは、登山の形態を、バス運行のモデル想定をも含めた中で考えてみることにした。

(1)登山モデルの推定

推定に使用するタイムスケジュールは次頁に添付したとおりである。なお、登山者数は、先に求めた平成12年の41199人に天候要素として3000人を加算した44000人として考える。

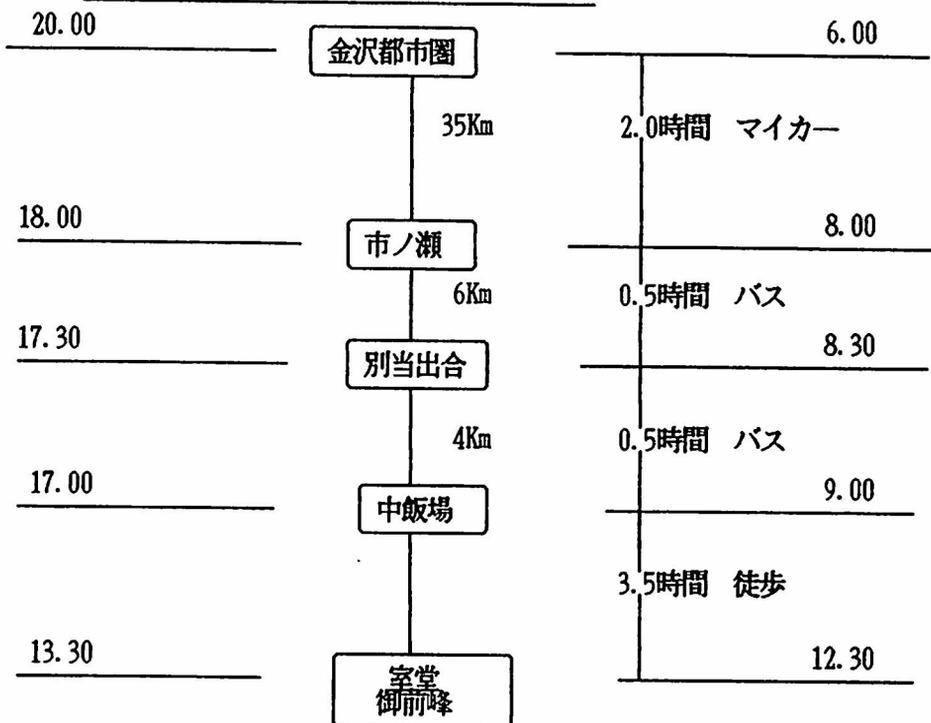
これに昭和62年の登山利用調査結果の月別登山者の分布率を適用すると次のようになる。

月	比率	登山者数	登山可能日	降雨日数
4	0.1	44	18	12
5	2.0	880	20	11
6	2.8	1232	19	11
7	40.7	17908	18	12
8	45.2	19888	23	8
9	4.7	2068	18	12
10	4.2	1848	18	13
11	0.3	132	13	17

表中の降雨日数は昭和48年から昭和61年までの金沢气象台記録の平均降雨日数である。

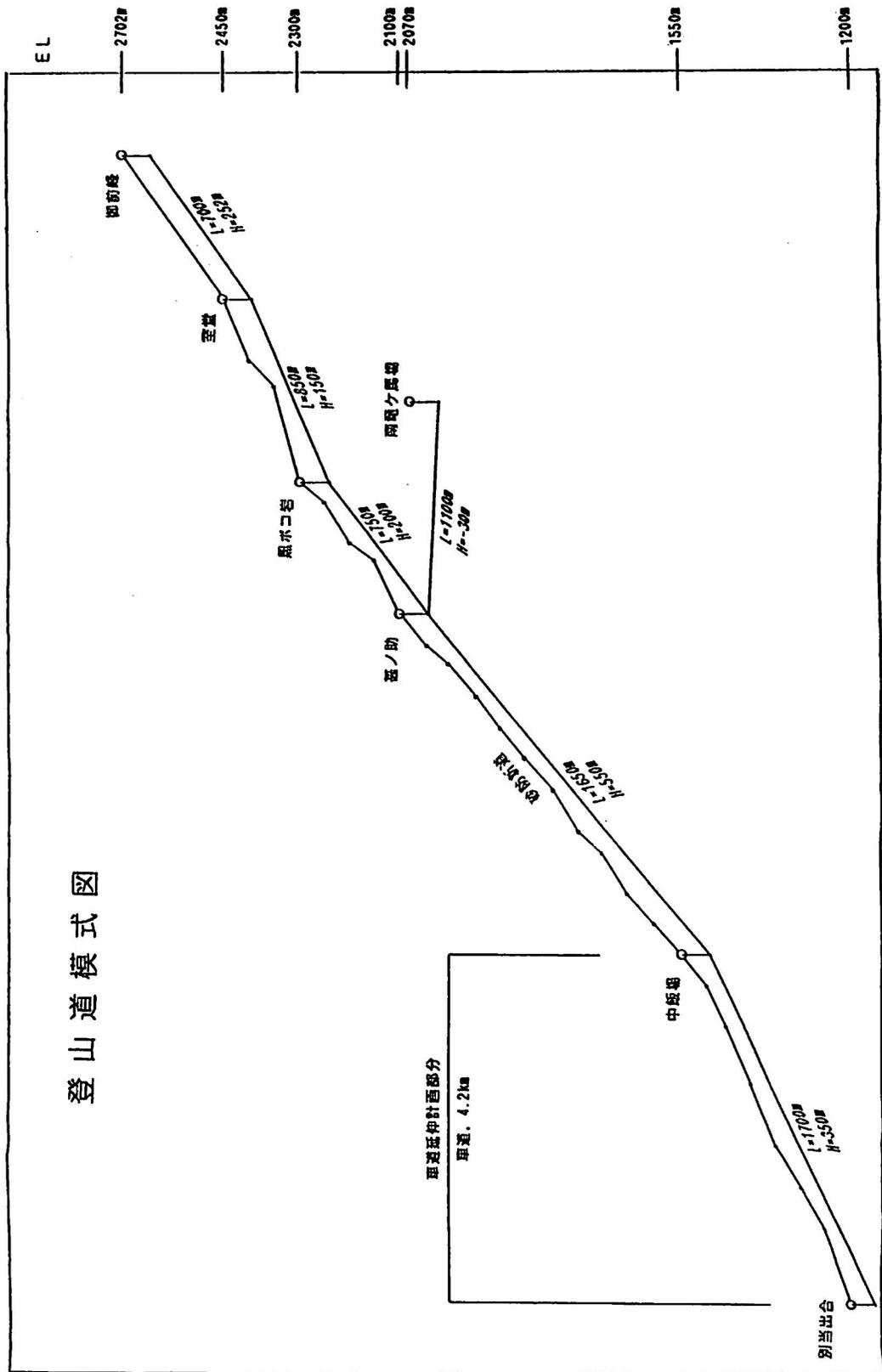
年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	備考
48	10	11	12	4	5	18	14	20	94
49	14	9	8	17	7	12	12	12	91
50	13	11	13	11	8	10	16	18	100
51	10	10	15	6	15	13	16	17	102
52	14	6	12	7	10	8	3	18	78
53	13	12	12	4	7	14	11	15	88
54	16	10	11	9	11	16	12	21	106
55	17	16	7	22	11	10	17	14	114
56	12	16	14	9	9	12	15	21	108
57	8	11	8	12	11	12	6	17	85
58	14	6	8	18	10	15	19	17	107
59	7	7	12	14	5	9	12	9	75
60	12	9	14	14	2	15	17	22	105
61	9	13	7	15	4	7	17	16	88
合計	169	147	153	162	115	171	187	237	1341
平均	12	11	11	12	8	12	13	17	

道路供用後の白山登山タイムスケジュール (日帰り)



登山道模式図は添付したとおりである。

登山道模式図



下の表は先に述べた登山可能日数をもとに、これに、昭和52年から62年の間の平均曜日別登山比率を適用して求めた年間登山者のモデル分布である。ただし、曜日別の比率は、土曜日を29%、日曜日を16%、その他の平日を55%とした。

月	登山日数	土曜回数	日曜回数	平日日数	土曜人数	日曜人数	平日人数
4	18	2	2	14	13	7	24
5	20	3	3	14	255	141	484
6	19	2	2	15	357	197	678
7	18	2	2	14	5194	2865	9849
8	23	3	3	17	5768	3182	10938
9	18	2	2	14	600	331	1137
10	18	2	2	14	536	296	1016
11	13	1	1	11	38	21	73

先に添付した「タイムスケジュール」によれば、新しい交通体系を利用するほとんどの日帰り登山者は、市ノ瀬発8時のバスに集中するように思われる。

現時点で大型観光バスの定員は補助席込みで、60人(北陸鉄道調べ)であるので、これを基準とし更にバスのピストン運転回数を3回までとして、各月別の配車台数を試算すると下のとおりとなった。

月	日数	土日日数	平日日数	土台数	日台数	平台数
4	30	4・4	22	-	-	-
5	31	4・4	23	4	4	23
6	30	4・4	22	4	4	22
7	31	4・4	23	60	32	92
8	31	4・4	23	44	24	92
9	30	4・4	22	4	4	22
10	31	4・4	23	8	4	23
11	30	4・4	22	-	-	-

合計台数474台

表の台数によれば、延べ台数は474台・日・年となり、1台あたりの日賃貸料を150,000円(北陸鉄道調べ)とすると、年間71,100,000円となる。

登山者44,000人のうち4月・11月(バスの配車はしないものとして)を除いた43,824人の90%(=39,442)がバスを利用するものとし、賃貸料にはねかえって来るものとすれば、一人当たりの料金は $71,100,000/39,442=1,800$ 円(片道900円)となり、考えられない金額ではない。

以上の検討結果より、道路延伸によるインパクト効果は期待出来るように思われる。

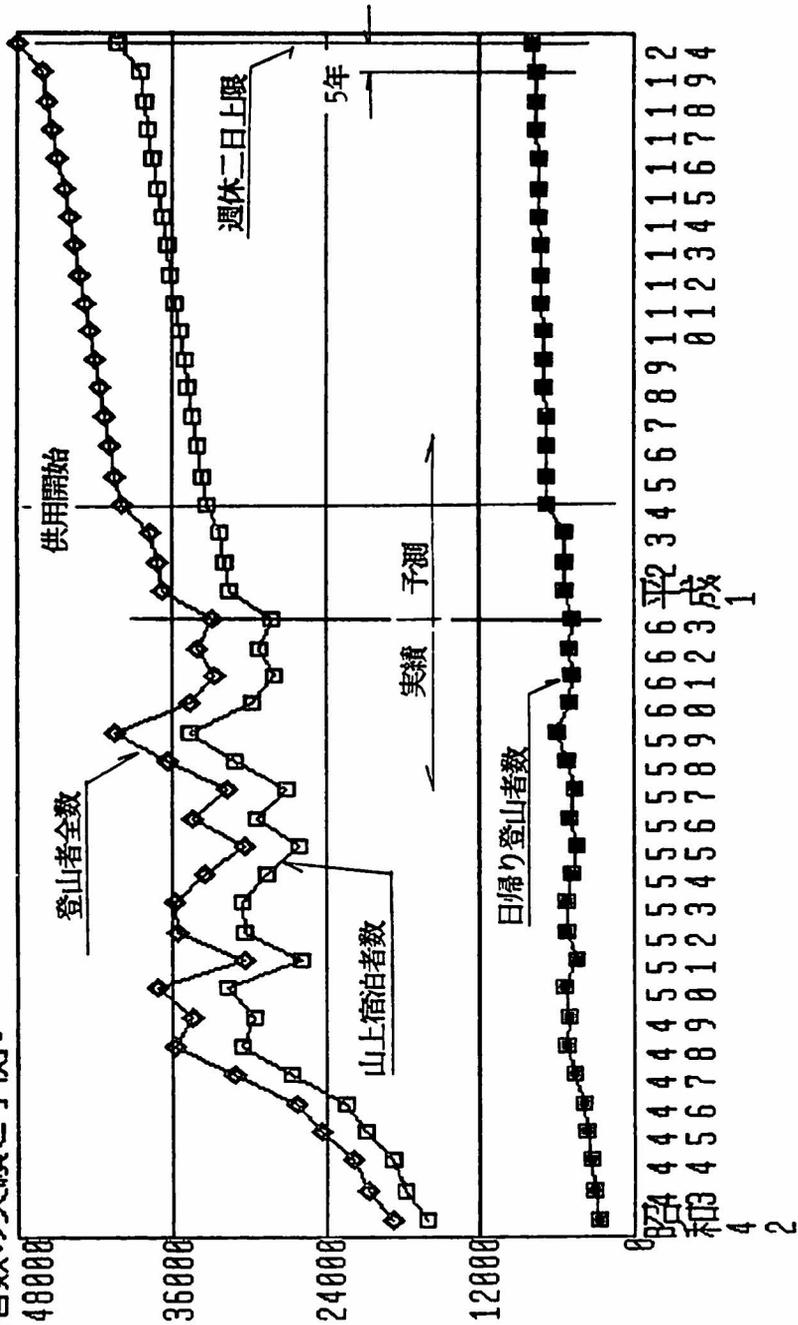
昭和61年に、福島・群馬の県境にある「尾瀬沼」への登山道にバスの運行がはじまり、それまで停滞気味であった入り込みに約10%のインパクト効果が見られた。この場合は、以前からのバス便もあり純然たるプラス要因として作用しているが、別当出合へのマイカーを規制する白山の場合とはやや趣を異にしている。

これらを勘案して、今回のインパクト効果は5%とみることにした。また、この効果は日帰り登山に対して3%、山上施設の宿泊利用に対して2%の割合であられるものとする。

以上の結果から算出した登山利用者数の過去の実績及び将来の予測数値は次表及び図に示すとおりである。

年次		自然増による登山者			インパクト分			全体の合計		
平成	昭和	宿泊	日帰り	計	宿泊	日帰り	計	宿泊	日帰り	計
	42	15933	2677	18610				15933	2677	18610
	43	17701	2974	20675				17701	2974	20675
	44	18621	3128	21749				18621	3128	21749
	45	20848	3502	24350				20848	3502	24350
	46	22377	3759	26136				22377	3759	26136
	47	26607	4470	31077				26607	4470	31077
	48	30580	5137	35717				30580	5137	35717
	49	29458	4949	34407				29458	4949	34407
	50	31685	5323	37008				31685	5323	37008
	51	25912	4353	30265				25912	4353	30265
	52	30330	5095	35425				30330	5095	35425
	53	30562	5134	35696				30562	5134	35696
	54	28572	4800	33372				28572	4800	33372
	55	25958	4361	30319				25958	4361	30319
	56	29414	4942	34356				29414	4942	34356
	57	27049	4544	31593				27049	4544	31593
	58	31073	5220	36293				31073	5220	36293
	59	34567	5807	40374				34567	5807	40374
	60	29650	4981	34631				29650	4981	34631
	61	27979	4700	32679				27979	4700	32679
	62	29144	4896	34040				29144	4896	34040
	63	28134	4727	32861				28134	4727	32861
	64	31461	5285	36746				31461	5285	36746
1		31807	5344	37151				31807	5344	37151
2		32154	5402	37556				32154	5402	37556
3		32501	5460	37961	759	1139	1898	33260	6599	39859
4		32848	5518	38366	759	1139	1898	33607	6657	40264
5		33194	5577	38771	759	1139	1898	33953	6716	40669
6		33540	5635	39175	759	1139	1898	34299	6774	41073
7		33887	5693	39580	759	1139	1898	34646	6832	41478
8		34234	5751	39985	759	1139	1898	34993	6890	41883
9		34580	5810	40390	759	1139	1898	35339	6949	42288
10		34927	5868	40795	759	1139	1898	35686	7007	42693
11		35273	5926	41199	759	1139	1898	36032	7065	43097
12		35620	5984	41604	759	1139	1898	36379	7123	43502
13		35967	6042	42009	759	1139	1898	36726	7181	43907
14		36313	6101	42414	759	1139	1898	37072	7240	44312
15		36660	6159	42819	759	1139	1898	37419	7298	44717
16		37007	6217	43224	759	1139	1898	37766	7356	45122
17		37354	6275	43629	759	1139	1898	38113	7414	45527
18		37700	6334	44034	759	1139	1898	38459	7473	45932
19		39433	6625	46058	759	1139	1898	40192	7764	47956
24										

[登山者数の実績と予測]



ウ、受け入れ側の対応

前章で道路延伸計画のインパクトを含めた「入り込み」の自然増を検討し、一つの長期予測を試みたのであるが、宿泊施設・交通機関等の登山環境に対しても、自然増に対応した改善努力が必要となることは言うまでもない、いわば「自然増」と「受け入れ側の改善努力」とは、表裏一体の関係にあるといえよう。

ただし、ここで取り扱う「利用」については、あくまでも「保護」とは切り離した考え方に立っていることを注記しておかねばならない。

このような観点に立って、以下に施設とその運用についての試案をまとめることとする。

(1) 道路延伸計画

道路延伸計画については、その供用によってもたらされるインパクト効果が、将来の入り込み予測に直結する問題であったため、前章でやや詳しく取り扱ったが、受け入れ側からした「能動的」な努力の一つであるといえる。

利用面から考えた場合、この道路計画がプラスの要素であることはまちがいのないところであるが、一つの重要な問題点を含んでいることも忘れてはならない。それは、「交通規制問題」である。

すなわち、従来は、交通に関わる各種の事情が、いわば、自然発生的なものとして理解され、利用者の苦情原因とはなりにくかった。たとえば、交通渋滞時における規制措置に関しても、アンケート回答者の約85%が「賛成」ないしは「やむをえない」と答えており、一見、十分な理解を示しているように見受けられるが、実情は、あくまで別当出合までのマイカー乗り入れが容認されていて、たまたまその容量を超えたためにとられた規制措置であったからであろう。

昭和63年の道路計画に対する「賛否調査」において、「賛成」と「反対」とがほぼ均衡していたことからその辺の事情を伺い知ることが出来る。

このことに加えて、過去の調査結果に現れているマイカーの高率利用・新道路計画に示されている市ノ瀬以降のマイカー進入禁止・試算によるバス運賃が従来のものに比べて比較的高額となったこと・などを考えあわせると、かなり綿密な計画のもとに、バスの運行体制を敷く必要があると考えられる。

このあたりの対応を果たせない場合には、登山利用の拡大が困難となるであろうし、かえって、白山のイメージダウンにつながりかねない危険性を含んでいるように思われる。

(2) 山上施設の対応

道路延伸計画が「能動的」な施策であるとするれば、施設に対する「受け入れ円滑化の努力」は「受動的」なものであるといえるが、この両面の解決なしには、登山利用拡大の目的を果たすことが出来ない。従って、この問題もまた重要な意味をもっている。

そこで、先の「登山利用の将来予測」をもとに若干の検討を試みることにしたい。

現在、山上には「室堂」と「南竜山荘・野営場」とがあり、それぞれの定員は750, 150, 500 の合計1400名となっている。

このうち室堂については、過去においても登山者が集中する時期においては、定員をかなりオーバーした実績をもっており、その状態は添付した表にも見られるとおりである。このような場合にあっても、南竜山荘や野営場については、必ずしも定員を満たしていないが、施設の利用便益からして、やむをえないものと考えられる。

次式によって各施設の定員から年間の登山宿泊者数を推算すると、

$$\text{年間登山宿泊者数} = \text{定員数} * 4 * 1/0.452 * 1/0.282$$

(ただし 0.452:8月, 0.282:土曜 の各集中度)

$$\text{室堂: } 750 * 4 * 1/0.452 * 1/0.282 = 23536$$

$$\text{南竜山荘: } 150 * 4 * 1/0.452 * 1/0.282 = 4707$$

$$\text{野営場: } 500 * 4 * 1/0.452 * 1/0.282 = 15690$$

合計 43933人

従って、南竜山荘および野営場が十分に活用されるならば、平成24年に対する予想値以上の容量を持っていることとなる。

しかし、実際には室堂に対して登山者が集中するため、現時点ですでに、室堂定員をオーバーする現象を見せている。

この、室堂に集中する傾向が今後とも続く限り、平成24年には、室堂の施設容量をおおむね倍増しなければならないことになる。ところが、一方では、このような状態が生起する季節や日が、極めて限られた短い期間でしかなく、それだけのために莫大な投資をすることにも矛盾を感じないわけにはゆかない。

昭和62-63年の定員オーバー調査

年度	月・日	曜	室堂	南庵	野営場
52	7-22	土	1733		
	7-23	日	1089		
	7-29	金	1332		
	7-30	土	1511		230
	7-31	日	1030		
	8-6	土	1032		
53	7-15	土	1043		
	7-22	土	1432		
	7-27	木	1164		
	7-28	金	1150		
	7-29	土	1644	209	242
	7-30	日	902		
	7-31	月	804		
	8-1	火	1311		
54	7-21	土	1498	250	228
	7-24	火	768		
	7-26	木	992		
	7-27	金	911	190	240
	7-28	土	1063	269	
	8-2	木	785		
	8-4	土		193	
55	7-26	土	1343		
	7-28	月	913		
	7-29	火	1069		
	7-30	水		161	
	8-2	土	1225		
	8-15	金	1108		
	9-14	日	857		
56	7-25	土	1092	202	374
	7-26	日	1282		255
	7-27	金	816		
	7-28	火	936		
	7-29	水	830		
	7-30	木	956		
	7-31	金	785		
	8-1	土	1388		414
	8-2	日	1018		
	8-4	火			204
8-14	金	1029		309	
8-15	土	831		328	
57	7-23	金	798		
	7-28	火	758	165	
	7-31	土	1274		
	8-3	火	788		
	8-7	土	1451		
	8-8	日	922		
	8-14	土	1147	191	

58	7-27	水		154	
	7-29	金	1186		
	7-30	土	1834		160
	7-31	日	1346		
	8-2	火	975		
	8-3	水	882		
	8-4	木	778		
	8-6	土	1503		
	8-7	日	909		
	8-13	土	974		
	8-14	日	1231		
59	7-27	金	803	159	
	7-28	土	1942	299	
	7-29	日	934		
	7-30	月	1110		
	8-2	水	942		
	8-3	木	1019		
	8-4	金	1607	228	217
	8-5	土	1095	163	
	9-23	月	847		
60	7-23	火			514
	7-26	金	824		
	7-27	土	1654	165	255
	7-28	日	1069		
	7-29	月	883		
	8-2	金	924		
	8-3	土	899	200	
	8-4	日	834		281
	8-6	火			250
	8-10	土	868		
8-15	木	1114			
	8-16	金	895		
61	7-26	土	1187		
	7-27	日	896		
	7-29	火	823		
	7-30	水	860		
	8-1	金	846		
	8-2	土	1635	205	
	8-3	日	1084		
	8-14	木	817		
	8-15	金	981		
		8-16	土	773	
62	7-25	土		172	
	7-27	月	842		
	7-29	水		153	
	7-30	木	875		
	8-1	土	1148	250	
	8-2	日	1127		
	8-7	金	810		
	8-8	土	1327	161	
	8-10	月		247	
	8-13	木	808		
8-14	金	1296	212	221	
	8-15	土	1130		
63	7-29	金	1000		
	7-30	土	1697	177	
	7-31	日	1232		226
	8-2	火			210
	8-6	土	1183		
	8-7	日	1047		
	8-13	土	844		217
	8-14	日	1279	203	284
	8-15	月	968		

(3) 山麓の施設

登山利用に直接関係のある山麓の施設としては、バスターミナルとなる市ノ瀬に宿と野営場とがあり、その定員はそれぞれ130,100である。しかし、この利用者は更に山上の施設を利用する機会が少なくないようであり、全面的に山上施設の助けとなるとは考えにくい。

以上で登山利用をとりまく各種の条件を整理したが、これらを勘案しつつ登山利用の拡大をはかるための施策について考えてみることにする。

エ、登山利用拡大への試案

1) 道路延伸計画

この問題については、すでにインパクト効果として将来予測に算入しており、能動的な要素であるのでここでは直接ふれないが、ただこれに関連して次の二項目を取り上げておきたい。

- * 市ノ瀬・別当出合間県道の狭あい部分の拡幅整備
- * バス配車・運行の体制整備(試算の程度は必要)

2) 山上の施設

新しい道路計画に伴い、交通規制が実施されることになるので、登山目的で白山を訪れる人々に悪いイメージをあたえないためにも、可能な範囲での宿泊施設対策を考えなければならない。そこで、つぎのように試算した。

- * 室堂の定員を10%アップする。換算登山者数・・・25890
- * 南竜山荘の施設整備と誘導により100%利用・・・4707
- * 野営場への誘導により10%程度の機能を期待・・・1569

計 32,166人

3) 山麓の施設

山上施設の利用状況説明によって、50%程度を山上施設の補助にあてるものとする。

$$230(\text{定員合計}) \times 4 \times 1/0.452 \times 1/0.282 \times 1/2 = 3609 \text{人}$$

2)3)の対策による宿泊可能容量=32,166+3,609=35,775人

これは、平成11年頃まで対応可能な人数である。

4) その他の対策

- * 市ノ瀬・別当出合・中飯場・南竜山荘・室堂を結ぶ情報線を確定し、山上施設の状況やバスの運行状況などを掲示板等により随時報道し、無用な混乱などが起きないようにすると共に誘導に役立てる。
- * 山上での生活用水の確保を計る。
- * 市ノ瀬ビジターセンターに登山案内所を設ける。
- * 登山歩道の整備を計る。